

新出上方歌舞伎台帳十種紹介

安田 徳子

江戸時代、名古屋において尾張藩御用を勤めた油商高麗屋の所蔵文献中には、芝居関係資料が含まれている。番付・絵尽し・浄瑠璃稽古本・台帳などである。番付は寛政期から明治初年までの上方と名古屋のもの、絵尽しは安永末年から文政期の上方のものであるが、台帳は十種で、もっとも上演の古いものは安永五年（一七七六）一月二日よりの大坂中の芝居二の替り狂言『伊賀越乗掛合羽』で、以下、寛政四年（一八二一）年上演の『同計略花芳野山』までの上方での上演台帳である。『歌舞伎台帳集成』に翻刻されている作品もあるが、未翻刻のもの、新出作品も含まれ、貴重な台帳群（高麗屋本と称す）と思われるので、ここに紹介し、この台帳群が収集された背景について少し考察を加えておきたい。

（一）

1、伊賀越乗掛合羽（いがごえのりかけがっぱ）

〔体裁〕半紙本（二三・五×一六・八糎）。縦本。仮綴。各冊とも表紙は押形紋地薄茶色厚紙。

〔冊数・丁数〕四冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊百一丁、第二冊五九丁、第三冊五八丁、第四冊六八丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕全冊同筆。

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等なし。

各冊表紙に「伊賀越乗掛合羽／大序ヨリ六段目〔紙数百丁〕（七段目／八段目〔紙数五十八丁〕、九段目／十段目〔紙数五十七丁〕、十一段目より／大切迄〔紙数六十七丁〕」の墨書、各冊第一丁表冒頭に「伊賀越乗掛合羽／自大序／至八段目（自七段目／至八段目、なし、第拾壹段目より／大切まで）^①」とあり、その後に役割目録を付す。台

詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「伊賀越乗掛合羽」は安永五年（一七七六）二月二日より大坂中の芝居の二の替りで初演された狂言で、この時の台帳は東京大学文学部国語研究室（大総二八一―一九、八冊、『歌舞伎台帳集成』34に翻刻）、京都大学付属図書館（大惣本四一―三二、五冊）等に写しが伝わっている。また、役割番付・絵尽し・狂言読本（安永六年刊、『歌舞伎台帳集成』34に翻刻）が残り、安永六年（一七七七）三月刊の役者評判記『役者花の会』に言及がある。

高麗屋本の各冊の役割目録に、座本は嵐七三郎、中山文七（唐木政右衛門）・浅尾為十郎（沢井又五郎）・中村歌右衛門（沢井城五郎・馬子大八）・沢村宗十郎（渡辺志津馬）・姉川大吉（笹尾）・嵐文五郎（靱負）・中山来助（佐々井丹左衛門・松倉金助）・中村久米助（おその）・嵐三十三郎・桐山紋治・市川吉太郎などであるので、これも初演時のものと思われる。これを東大本と比較すると、「道行 十段目」を欠き、四冊に合綴されているが、それ以外の内容はほとんど変わらない。朱等の書入や訂正もなく、きれいに書写されているので、東大本と同系統の初演時台帳の写しと考えられる。

ところで、東大本には第一冊表と第八冊表に「大野屋惣八」の蔵書印と保護後表紙に「指峰堂」の墨書がある。東大本は所謂大惣本で、名古屋長島町で明和年間から営業していた貸本屋大野屋惣八の

蔵書だったものである。指峰堂は同じ名古屋で安永から天明頃に版元業を営んでいた伊勢屋忠兵衛（西村忠兵衛）のことで、『尾陽劇場事始』の作者でもあり、芝居には高い関心を持っていた人物である。他にも多くの著作があり、その中には大惣本として伝存するものもある。これらの事を勘案すると、指峰堂が自ら書写したかどうかはわからないが、指峰堂が所持していたものを大惣に譲ったということであろう。一方、本台帳を所蔵する高麗屋は名古屋橋町に居を構えていた。橋町裏芝居は尾張二代藩主徳川光友の公許以来、橋町町方の運営によって経営されていた。高麗屋はその橋町の有力町人だったのだから、あるいはその橋町芝居のために大惣本を元にこの台帳を書写させて所蔵していたのかもしれない。道行部分は浄瑠璃正本を使用することもあり、削除したのであろう。現在確認できる「伊賀越乗掛合羽」の橋町芝居での上演は、文化二年（一八〇五）一月二日より及び文政八年（一八二五）九月二五日よりの二度が確認ができ、高麗屋には後者の役割番付も所蔵されているが、直接の関わりを示すものはない。

2、けいせい大内の雛形（けいせいおおちのひながた）
〔体裁〕半紙本（二五・二×一七・一糎）。縦本。仮綴。各冊とも紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕四冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊九四丁、第二冊八四丁、第三冊七二丁、第四冊九五丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕全冊同筆。

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等なし。

各冊表紙に「〔眉間尺の紋所／貫練の紋色〕けいせい大内の雛形／大序／〔紙合九拾二丁〕（中入）／〔紙合七拾九丁〕、三ッ目／〔紙合六拾二丁〕、大切／〔紙合九拾三丁〕」の墨書、第一冊には中表紙があり、

眉間 此注文ハ勇者の

尺の 染色あつらへ申ス 附リ

紋所 尼子の残党

貫練 此模様ハ義者の

の 仕立際請取申ス 並ニ

間夫も可愛い客もいとし
い遊里の諸礼躰方愜気て
くだの法式ハ寸尺たがへ
ぬ大幅組仇と情を立わけ
た桃と柳の生筒に主君を
育る赤子の反逆

けいせい大内の雛形
婚礼も白かさね切腹も白
むく城廓の意気地たてと
ふす三々九度の本式ハ色
なをしの小袖組睦と真を

紋合 毛利の一党

縫上た糸桜の馬場先に四
海を納る捨子の行烈

とある。これは役割番付一枚目の外題部分と同じである。各冊第一丁表冒頭に「けいせい大内の雛形 発端（中入、三ッ目、大切）」とあり、その後に役割目録を付す。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「けいせい大内の雛形」は安永九年（一七八〇）正月一七日より京四条南側芝居の二の替りで初演された狂言で、この時の台帳は東京大学文学部国語研究室（大総二八一―一六〇、四冊）、京都大学付属図書館蔵（大惣本四―三二ケ二、四冊、台帳集成39に翻刻）に伝わっている。両台帳の中で『歌舞伎台帳集成』39に翻刻された京大本が、その解説（松崎仁）にも述べられている如く、もっとも原型を伝えていると考えられ、東大本はその写しであろう。この時の二枚組役割番付と絵尽しが残っており、安永九年三月刊の『役者晴小袖』にも言及がある。高麗屋本台帳の各冊の役割目録に、座本は中山猪八、嵐三五郎（大内義隆）・嵐吉三郎（貫練門平）・浅尾為十郎（山中鹿之助・眉間尺の紋平）・浅尾国五郎（大友弾正・鳴戸幸景）・沢村国十郎（岩淵主税・五々らの五郎次）・山科甚吉（けいせい春雨）・尾上新七（毛利元就）・山科槌五郎（けいせい三浦）などとあるので、これも初演時の台帳と思われる。これを、京大本と比べると各所に台詞

の欠落や異文が見られるが、東大本とはほとんど同じで、朱等の書入や訂正もなくきれいに書写されているので、東大本と同系統の初演台帳の写しと見てよからう。ところで、東大本は大惣本だが、第四冊に「書林／尾州名古屋本町三丁目／伊勢屋忠兵衛」の黒角印があり、これが墨の「×」で消されている。この本も前述の『伊賀越乗掛合羽』同様に、指峰堂の旧蔵でこれを大惣が入手して貸本としていたものと思われる。高麗屋本はおそらく東大本を元に書写されたものであろう。

3、傾城正月の陣立（けいせいむつきのじんだて）

〔体裁〕 半紙本（二四・七×一七・二糎）。縦本。仮綴。各冊とも共紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕 七冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊九〇丁、第二冊六三丁、第三冊七九丁、第四冊一五丁、第五冊五六丁、第六冊一五丁、第七冊一六丁。

〔行数〕 原則として一〇行

〔筆跡〕 各冊別筆か。

〔印記等〕 各冊表紙と裏表紙の綴目及び第四冊と第五冊第一丁表に「吉二」の黒長角印が押されている。また、第四冊と第五冊裏表紙には「芳二」、第六冊裏表紙には「為川」の墨書がある。「吉二」と

「芳二」は同一人物を示し、本台帳の所蔵者のものと思われる。第二冊、第三冊には貼紙による書入、墨による抹消・訂正書入があり、台詞脇の役者名には朱による訂正がある。第六冊にも墨による抹消・書入がある。

各冊表紙には、第一冊「傾城正月の陣立／口明／紙上八拾七帖」、第二冊「傾城正月の陣立／中入 七草村の段／紙数四拾七帖」、第三冊「巳歳二替」けいせい正月の陣立／三ッ目島原の段／紙数五十三帖」、第四冊「傾城正月の陣立／小幕」紙員拾七丁」、第五冊「曲輪の遊興に蓬萊組重／取集たる大騒ハ都の寫原」けいせい正月の陣立／世話場／紙数五十八挺」、第六冊「傾城正月の陣立／大切 所作の間」紙員十三帖」、第七冊「曲輪の遊興に蓬萊組重／取集たる大騒ハ都の寫原」傾城正月の陣立／大切所作事 七変化七艸拍子「加美歌寿十三帳」の墨書、第五冊の表紙見返しに「巳ノ歳二ノ替リ／座本中村桑太良」とある。各冊冒頭に役割目録を付す。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「傾城正月の陣立」は天明五年（一七八五）正月二五日より大坂中の芝居の二の替りで初演された狂言で、この時の役割番付が残っており、安永九年三月刊の『役者百嚙』に言及がある。高麗屋本台帳の第五冊表紙見返し記述、各冊の役割目録には、座本は中村桑太郎、松本幸四郎（細川和泉守・白酒屋四郎兵衛）・山下金作（乳母此町・

縫物師匠お安・甚太夫娘お里）・三桵大五郎(島野勘左衛門)・岩井半四郎(和泉守奥方八代・けいせい太夫野)・姉川新四郎(簀藤作・天草四郎時貞)・加賀屋歌七(橘甚太夫・桜井主水)・市山助十郎(浪島平治郎)などとあることから、これは初演時のものと思われる。しかし、本台帳の役割目録と役割番付の配役には多少の相違があり、さらに第二冊と第三冊には多量の改訂があり、配役の変更の記載もある。この二冊と第六冊は筆跡も粗雑で、上演台帳そのものかもしれない。ただ、役者名の訂正には例えば「半九」「仲八」「国五郎」「喜十」など台帳の役割目録や役割番付に見えない名があり、金作役の「お里」の台詞には朱で「半四郎」などの変更も見られる。これらの役者は、同年七月二六日から京四条北側西大芝居中山猪八座で「傾城島原の陣立」と改題されて上演された再演時と一致する。したがって、これは初演台帳の写しを元に改訂・修正を加えた再演時の台帳と思われる。第一冊と第四冊、第五冊はきれいに書写されており、改訂もない。これらは初演台帳の写しと見るべきであろう。再演時に改訂が加えられなかったということか。猶、「傾城正月の陣立」の台帳は、高麗屋蔵の他には、東京大学文学部国語研究室(大総二八一―一八三、四冊)と愛知県立大学図書館(貴九一二五―一六―一八、六冊)及び国会図書館(八二四―一)に所蔵されている。きれいに整えて書写された愛県大本は、高麗屋本の第六・七冊が一

冊に纏められているが、第一冊と第四冊、第五冊はほとんど同じで同系統と思われる。しかし、第二冊と第三冊、第六冊の改訂部分は全く反映していない。

4、大湊恋憶当(おほみなとこひのやりくり)

〔体裁〕半紙本(二四・八×一七・四糎)。縦本。仮綴。各冊とも共紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕五冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊六三丁、第二冊八七丁、第三冊一九九丁、第四冊六二丁、第五冊七四丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕全冊同筆。

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等なし。

各冊表紙には、第一冊「[早川又兵衛/根強四郎右衛門]大湊恋憶当/口明/[墨附六拾五挺] (二ツ目/[墨附八十九挺]、三ツ目/[墨附二十一挺]、四ツ目/[墨附六十四挺]、大切/[墨附七十六挺])」の墨書。各冊冒頭に役割目録を付す。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「けいせい大内の雛形」は天明六年(一七八六)三月二〇日より大坂大西芝居で初演された狂言で、この時の役割番付が残っている。

高麗屋台帳の各冊の役割目録に、座本は坂東金次郎、浅尾為十郎

(ねつの四郎右衛門・和泉屋伝兵衛・頭の市兵衛)・花桐豊松(吉兵衛女房おさよ・又兵衛女房およし)・岩井半四郎(四郎右衛門女房おさん)・中山来助(和泉屋源次郎)・三栴大五郎(早川又兵衛)・中山他蔵(姥の吉兵衛)・嵐七五郎(鹿かりや彦兵衛)・市川団蔵(堤惣右衛門) などとあるので、これは初演時の台帳と思われる。

この狂言の台帳は東京大学文学部国語研究室(大総二八―六五、四冊)に写しが伝わっている。これもやはり大惣本で、各冊表紙には「根津四郎右衛門が十七回忘世話事／木津七兵衛が三年振色事」大湊恋憶当／大序(二目三目、四目五目、大切)とあり、裏表紙「四冊之内／機英堂」と墨書、また、第四冊裏見返しに「天明六丙午年道頓堀大西の芝居」とある。書入などはほとんどなくきれいに書写されているので、これも初演台帳の写しと考えられる。墨書の「機英堂」は不明だが、機英堂蔵本を大惣が入手して貸本としたものであろう。東大本は、高麗屋本の第二冊と第三冊に当たる部分が合綴されているが、両者はほとんど変わらないので、おそらく高麗屋本は東大本を元に書写されたのであろう。

5、けいせい花発船(けいせいはいなかだ)

〔体裁〕半紙本(三・九×二六・七糎)。縦本。仮綴。各冊とも共紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕五冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊六一丁、第二冊七七丁、第三冊二〇丁、第四冊六丁、第五冊三二丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕全冊同筆。

〔印記等〕各冊表紙と表裏表紙の綴目及び第三・四・五冊の第二丁表に「吉二」の黒長角印が押され、表裏表紙の綴目には「蔵」の朱丸印が重ねて押されている。また、第一・二・三・四冊第二丁表には「名古屋門前町／伊勢屋太兵衛」の黒角印があり、この内、第一・二・四冊のものは墨で「×」印で抹消されている。「吉二」は誰の印記かわからないし、伊勢屋太兵衛についてもわからないが、いずれも旧蔵者の印記で、本台帳は名古屋に伝来してきたものと思われる。表紙には、第一冊「京四条北西ノ芝居／未ノ歳二ノ替リ狂言」／室津の娼娼／播磨の何某けいせい花発船／「口明」、第二冊「室津の娼娼／播磨の何某けいせい花発船／「紙数七十三葉／二目」、第三冊「けいせい花発船／「紙数拾八挺／小幕」、第四冊「けいせい花発船／「四世話場」／「紙数五拾八帖」、第五冊「大西芝居／二替新狂言」／けいせい花発船／「切道行春のおだ巻」／「紙数三拾四帖」とある。各冊冒頭に役割目録を付す。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「けいせい花発船」は天明七年(一七八七)二月四日より京四条北

西芝居の二の替りとして初演された狂言で、この時の役割番付・絵尽しが残っている。初演は好評だったらしく、翌天明八年四月・五月に大坂大西芝居で再演されたのをはじめ、上演が繰り返されている。

高麗屋本台帳は五冊であるが、初演の役割番付には「六冊物」とあり、その後に大切所作事「^道行春のおだ巻」が付いており、場割に相違があるように思われる。しかし、高麗屋本台帳の第一冊表紙に「京四条北西ノ芝居／未ノ歳ニノ替り狂言」とあり、各冊冒頭の役割目録に、尾上新七（小早川帶刀・三輪の左衛門）・藤川八蔵（吉川橋之助）・浅尾国五郎（岸田兵庫）・嵐三八（絹笠緑之助・松浦緑之丞・船頭丸作）・嵐七五郎（船頭文字兵衛・川越鉄八）・嵐吉三郎（三笠隼人）・嵐三五郎（毛利弥生之助）・沢村国太郎（傾城浪花津・傾城長門）・芳沢いろは（帯刀妹紅葉）・山本友右衛門（丸亀郡領）などであるのは、初演番付と一致している。ところが、第二冊の役割目録では、座本沢村元三郎（皐月姫）、新四郎吉川橋之助）・三八（八代参太郎）・いろは（船橋）、あるいは第三冊でも、三八（事触駄七）・七三郎（三笠隼人）・花咲（巡礼とこよ）とあるなど、各冊配役が異なる部分もある。また、第五冊には右の如く「大西芝居／二替新狂言」との墨書があり、これは天明八年四月の大坂大西芝居での再演時を示すものと思われる。初演と再演の役割番付や絵尽しを比

較すると、ほとんどの役者が同じ役割で出勤している。初演に出勤の役者の中で、嵐七五郎（川越鉄八など）と藤川八蔵（吉川橋之助）、浅尾国五郎（岩田兵庫）・山本友右衛門（高松郡領）らは再演時には見えず、再演時には姉川新四郎（吉川橋之助）・加賀屋歌七（八代勘解由）・坂東岩五郎（川越鉄八・岸田兵庫之介）らが加わっている。これらを高麗屋本台帳の役割と比較すると、第三冊で「三笠隼人」役を七三郎とするが、この役は初演再演を通じて吉三郎でいずれとも合致しない。但し、これは「七」と「吉」の誤写と見ることができると。「巡礼とこよ」と「事触駄七」は再演にしか出てこない役名であるが、これを演じる花咲と三八は初演再演両方に出勤している。その他は初演の役割に合致するので、初演においても役割番付と高麗屋本台帳では筋立に多少の相違があったと見るべきであろう。また、第二冊に「座本沢村元三郎」とあるが、座本は、初演は蛭子屋吉郎兵衛、再演は嵐文吉で、いずれとも合致しないが、元三郎は天明六年に京四条北側芝居の座本を勤めており、本狂言では初演・再演とも「皐月姫」で出演しているので、混乱したのであろう。さらに、再演に出勤した坂東岩五郎の記載がどの冊にも無いことも少し気にはなるが、高麗屋本台帳は、第一・三・四冊は初演時のもの、第二・五冊は再演時のものの取合せと考えてよからう。

「けいせい花発船」の台帳は他に東京大学文学部国語研究室と日

本大学総合情報センターに蔵されている。この内、東大本(大総二九一二〇九、三冊)はやはり大惣本で、大惣の貸本用の共通表紙が賦されている。高麗屋本と冊数に相違はあるが、これは第三冊目に高麗屋本の第三・四・五冊に当たる部分が合綴されているからで、台詞に多少の相違はあるが、内容はほぼ一致している。しかし、各冊冒頭の役割目録は役名のみ、台詞頭部の注記も役名で付されている、役者名がない。これらを勘案すると、東大本と高麗屋本は近い関係にあるが、高麗屋本の方が原型を伝えていると見られる。

6、化粧六歌仙(よそおいろっかせん)

〔体裁〕半紙本(二四・八×一七・三糎)。縦本。仮綴。共紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕一冊。丁数は表紙を含んで、四二丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等なし。

表紙には「浅尾の座中ハ御最貞源平の雨乞潤ひ／叶の一世一代ハくりかへす苧環の願乞勢ひ」化粧六歌仙」とあり、その後に役割目録を付す。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「化粧六歌仙」は寛政元年(一七八九)一月一日より大坂中の芝居(浅尾弥太郎座本)の顔見世に叶雛助一世一代として初演された

所作事で、六歌仙物の嚆矢とも言うべき曲である。この後、雛助は、翌寛政二年二月京四条南側、同三月は四条北側、その翌年寛政三年八月には大阪北の新天地と繰り返し踊り、二代目雛助などに引き継がれた。初演時の役割番付・絵尽し、その後の再演を伝える番付も残っているが、詞章曲節は残っていない。二代目雛助は寛政二年四月二日より江戸市村座において長唄に改曲して踊っており、この時の正本は残っている。

冒頭の役割目録によると、叶雛助(仕丁卯作、本名五太三郎)・関三十郎(大筆熊五郎、仕丁藤五郎)・山下金作・大五郎・岩五郎・沢村京十郎(深草少将)・友右衛門・七三郎・沢村国太郎(小町姫、本名几帳)・山村儀右衛門(五と平、本名文屋宮田丸・中納言国経)・藤藏・姉川新四郎(仕丁又四郎)・山下八百蔵とあり、初演の時の役割番付、絵尽しとも一致するので、初演台帳の写しと見てよからう。この高麗屋蔵本以外に本作の台帳は知られていない。

7、敵討千手護助劔(かたきうちせんじゅのすけだち)

〔体裁〕半紙本(二四・八×一七・四糎)。縦本。仮綴。各冊とも共紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕七冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊二五丁、第二冊二四丁、第三冊五六丁、第四冊七〇丁、第五冊七二丁、第六冊

六二丁、第七冊三三丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕全冊同筆。

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等なし。

各冊表紙に「〔勢州亀山／讃岐丸亀〕敵討千手護助劔／口明／〔墨附二十七挺〕〔弐ッ目／〔墨附二十七挺〕、三ッ目／〔墨附五十八挺〕、四ッ目／〔墨附七十二挺〕、五ッ目／〔墨附五十八挺〕、六ッ目／〔墨附六十四挺〕、大切／〔墨附廿五挺〕の墨書があり、各冊第一丁に役割目録を付す。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「敵討千手護助劔」は寛政二年（一七九〇）八月四日より大坂中の芝居（浅尾弥太郎座本）で初演された狂言で、この時の上演を裏付け資料としては役割番付・絵尽しが残っている。この作品は評判を得た作品だったらしく、翌寛政三年三月には京四条北側東、翌四年八月には京四条北側西の芝居で再演されたのをはじめ、その後も繰り返し上演されている。

高麗屋本各冊の役割目録によると、山下金作（石井奥方お來・おていの方）・山村儀右衛門（最上八之丞・赤堀水右衛門）・嵐新平（真宮源五）・三枅大五郎（中野藤兵衛）・尾上新七（石井兵衛・三木十左衛門）・山下八百蔵（由兵衛女房お竹）・姉川新四郎（飯田由兵衛・岩倉主膳正）・中村京十郎（石井兵助）・座本浅尾弥太郎（娘おとき）な

どで、初演の時の役割番付、絵尽しとも一致する。書入などもなくきれいに書写されているので、高麗屋本は初演台帳の写しと見られる。猶、「敵討千手護助劔」の台帳としては、京都大学付属図書館蔵（大惣本四一三二カ六、五冊）、東京大学文学部国語研究室（大総二八一〇一、五冊）、国会図書館（三冊、演劇台帳の内）、松竹演劇図書館（文政一〇写、六冊に所蔵されている。この中で、京大本と東大本はいずれも大惣本で、高麗屋本の第一冊と第二冊、第五冊と第六冊を合綴した形態をとっているが、同系統の初演台帳の写しと思われる。

8、競伊勢物語（はなくらべいせものがたり）

〔体裁〕半紙本（二四・八×一七・二糎）。縦本。各冊とも共紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕一〇冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊二二丁、第二冊一九丁、第三冊一七丁、第四冊四四丁、第五冊現存四八丁（冒頭部分欠）、第六冊三二丁、第七冊四五丁、第八冊四一丁、第九冊五丁、第一〇冊六四丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕五／八冊別筆力。

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等はないが、裏表紙に各冊と

も「九二」と墨書され、第一〇冊にはさらに「千秋万歳楽叶」の墨書もある。

第一冊表紙に「〔附春日野、若紫のすり衣しのふのみたれかきり知られず／並見る目かるなきかたいつこそ棹として我におしへよあまの釣舟〕」「大和に筒井里／河内に生駒山」競伊勢物語／壹冊目／「紙数十八挺」とあり、中表紙には語りを付した外題が記され、「五冊八段」とある。その後寛政三年（一七九一）二月一日よりには大坂角の芝居（浅尾奥次郎座本）の役割番付が綴じ込まれている。第二・三冊は表紙に「〔大和に筒井里／河内に生駒山〕競伊勢物語／式冊目／「紙数拾六挺」、第三冊以下は表紙に「競伊勢物語三冊目前／「紙員十五挺」（三冊目／「紙員四拾二挺」、（表紙欠）、五冊目／「紙員二拾挺」、六冊目前／「紙数八拾三挺」、〔六冊目後〕、道行雲井の浮名／「七冊目」、大切八冊目／「員六拾壹挺」」の墨書がある。但し、第五冊は冒頭部分に欠落があり、表紙記載は不明、末尾に「競四ノ了六十一」の墨書があるので、この冊は四冊目で墨附六一丁であったと思われる。各冊第一丁には役割目録を付す（第五冊のみ「競伊勢物語 五冊目」の墨書があり、その後に役割目録）。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「競伊勢物語」は安永四年（一七七五）四月五日より大坂中の芝居（嵐松治郎座本）で初演された狂言で、この時の上演台帳は早稲田大

学演劇博物館にあり、『歌舞伎台帳集成』43に翻刻されている。その後、安永九年三月六日（三日とも）より京四条南側芝居、天明三年（一七八三）四月一日より大坂中の芝居、天明八年七月一日より大坂若太夫芝居、寛政三年二月一日より大坂角の芝居と再演が繰り返された人気狂言となっていた。

高麗屋本台帳の役者目録には、浅尾為十郎（孔雀三郎）・三樹大五郎（河原の左大臣）・芳沢いろは（在原業平）・春日野豆四郎・宿弥女房通路・村雨）・姉川新四郎（荒川宿弥春久）・仕丁和田作・小野篁・市川団藏（紀有常）・関三十郎（斑鳩藤太基国）・嵐三五郎（春日野こよし）・仕丁此兵衛・中納言行平）・山村友右衛門（惟喬親王）・嵐三八（どらのように八）・山下金作（寢覚御前）・尾上松助（名虎亡魂）・小川吉太郎（堀川大臣昭宣）・中村のしほ（井筒姫・娘しのぶ）などであり、添付された役割番付と一致しており、寛政三年二月の大坂角の芝居の上演台帳の写しと認められる。同じ時の台帳は阪急池田文庫に一冊本がある。

これを初演台帳と比較すると、概ねの筋立は同じだが、細部の台詞や竹本にかなりの異なりがあり、初演から改変を加えながら再演が繰り返されていたことが窺われる。

9、新造妹背の中酌（しんづくくりいもせのなかぐみ）

〔体裁〕半紙本(二三・九×二六・九糎)。縦本。仮綴。各冊とも紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕二冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊六五丁、第二冊五三丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕全冊同筆。

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等はないが、二冊とも裏表紙に「二冊物／九二」と墨書されている。表紙には、第一冊「〔お菊／幸助〕新造妹背の中酌／上之巻／〔紙頁六拾三葉〕」、第二冊「新造妹背の中酌／下之巻／〔墨附五拾二挺〕」と墨書があり、両冊とも第一丁には役割目録を付す。目録によれば、尾上新七(高島丈助)・姉川新四郎(伯父与三右衛門)・山下八百蔵(浮瀬おまつ)・中山来助(手代幸助)・吉沢いろは(けいせい菊川)・中村のしほ(娘おみち)・浅尾為十郎(幸助親平次兵衛)・三枅大五郎(仲仕又助)・小川吉太郎(絆屋助次郎)・中山文五郎(松江丹蔵)・三枅松五郎(手代他蔵)などとなる。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「新造妹背の中酌」は何時どこで初演された狂言かは不明であるが、中山猪三郎座本での絵尽し「新造妹背の中酌 全」(石水博物館蔵五一―一三、五四―三九)が残っている。その表紙裏と第一丁表の見開きが「古戦場鐘掛の松」「女非人敵討」「壇浦兜軍記 琴責

の段」、第一丁裏と第二丁表裏が「新造妹背の中酌」で、巻末に半丁の役割番付が添付されている。これによると、中山友九郎(幸助)・尾上叡蔵(菊川)・中山猪三郎(酒屋助九郎)・中山咲之助(傾城子町)・中山新七(仲仕又助・丈助)・萩野伊太郎(与三右衛門)・嵐歌七(幸助親源次兵衛)・中村友三郎(手代太七)・藤川東蔵(松江丹蔵)・尾上龜菊(おまつ)で、「天鷲の段」「浮瀬の段」「子町の段」「若太夫芝居の段」「酒屋の段」「平野町の段」が描かれている。役者はいずれも大芝居には見られない者ばかりである。これから見ると、この絵尽しは中山猪三郎座、おそらく大坂若太夫芝居と考えられるので、寛政三年(一七九一)に上演されたものかと思われる。

高麗屋本台帳は上下二巻だが、絵尽しと比較すると、筋立はほぼ同様で「若太夫芝居」に関わる部分もある。そこに「いわんすないノく／助次郎殿が若太夫ノ芝居でノ難儀幸助殿があつらふていやんす所へ頼母しういふて渡した印札ハ芝居ノ木札最前あそこから一寸聞ケバおれや中ノ芝居ハ嫌ひじやついと見た事もないというふたわろが若太夫ノ芝居で株札を渡しこといひく御前ノ手から出た印札ハ芝居ノ木札詞ノてんく／かたりノ証拠何とうござハとれまいがの。」という台詞がある。他座を持ち出すとも思えないので、この台帳も中の芝居か若太夫芝居で上演されたものであろう。また、末尾近くで聞こえてくる淨瑠璃に準えて論ず部分に「堀江ノ此太夫座で大当

りを取ました有職鎌倉山といふ狂言でござります」という台詞がある。これは寛政元年（一七八九）六月二日より大坂北堀江市の側の芝居で初演された人形浄瑠璃『有職鎌倉山』を指しているの、これ以降あまり時を隔てない頃の上演と見ることが出来る。しかし、台帳と絵尽しでは、役者が異なり、役名も少し異なっている。高麗屋本台帳の役者は、絵尽しと同時代の役者だが大芝居に出ている者が中心である。その中で、中山来助は寛政五年一〇月に中山文七を襲名しているので、これ以前の出勤である。これから高麗屋本台帳は、右絵尽しと同じ頃、別の座組でおそらく大芝居で上演されたものと思われる。想像をたくましくすると、高麗屋の台帳は寛政元年以降に中の芝居辺りで初演された時のもので、絵尽しはそれを少し書き換えて再演した時のものと見ることもできようか。

「新造妹背の中酌」の台帳は、他に東京大学文学部国語研究室（大総二九―二九一、二冊）、京都大学付属図書館（大惣本四―三一シ六、二冊）及び国会図書館（一九一―四〇七）がある。東大本と京大本はいずれも大惣本だが、京大本は高麗屋本とは多少台詞に相違がある。また、京大本見返しに「新造妹背の中酌ト／鏡山後日の内の書ト／同事也」の墨書があり、国会本の扉に「新狂言鏡山後日世話事 藤川八蔵座」とある。藤川八蔵は寛政七年から九年にかけて大坂角の芝居で座本を勤めているので、その間の上演台帳と思われるから、高麗屋台帳の上演より後のものと思われるが、「鏡山後日」

狂言が確認できないので、詳細は不明。

10、同計略花芳野山（とばかりはなのよしのやま）

〔体裁〕半紙本（二四・五×一七・二糎）。縦本。仮綴。各冊とも共紙白無地表紙。

〔冊数・丁数〕二冊。各冊丁数は表紙を含んで、第一冊五三丁、第二冊四二丁。

〔行数〕原則として一〇行

〔筆跡〕全冊同筆。

〔印記等〕書入・奥書・識語・蔵書印等はないが、下巻裏表紙に「千秋万歳楽／叶」と墨書されている。表紙には、第一冊「同計略花芳野山／上巻／〔紙数五十丁〕」、第二冊「同計略花芳野山／下巻／〔紙数四拾五丁〕」と墨書があり、両冊とも第一丁には役割目録を付す。目録によれば、嵐三五郎（楠正行・塚本狐）・山下八百蔵（伊賀の局）・嵐栄蔵（朧夜）・中山栄蔵（行脚の僧）・沢村徳三郎（花の香）・嵐源之助（後醍醐天皇）・嵐吉三郎（楠正行）・嵐三八（杉本坊）・藤川友吉（弁の内侍・千枝狐）・花桐富松（呉服姫）・中村歌右衛門（遠地左五郎）などである。台詞は「一」と記し、脇に役者名を略記する。

「同計略花芳野山」は、寛政四年（七九）八月一六日より大坂北の新地芝居（花桐富松座本）の役割番付に見える上演が最も古く、これが初演と思われる。この上演は好評だったらしく、前狂言を変え、配役も少し変えて次の月も上演が続けられ、十一月には別の配

役で京四条北西芝居で上演されている。さらに、翌年も翌々年も嵐三五郎を中心の再演が繰り返されている。高麗屋本台帳の役者目録は、嵐三五郎を中心とした座組だが、いずれの上演とも少しずつ異なり、一致する記録は見出せない。今のところ、台帳の上演時と場所を特定することはできない。

ところで、「同計略花芳野山」の台帳は、京都大学付属図書館(大惣本四一三一二、二冊)と早稲田大学演劇博物館(一冊)、阪急池田文庫(二冊)に蔵されているが、京大本は大惣本で、高麗屋本とはほとんど同内容である。

(1)

以上、一〇種の台帳を紹介・検討したが、この中で『化粧六歌仙』は他に台帳の所在を聞かないので、新出の初演台帳と見られる。また、『けいせい大内の雛形』『傾城正月の陣立』『大湊恋憶』『けいせい花発船』『敵討千手護助剣』『新造妹背の中酌』も台帳の存在は僅かしか知られていないので、高麗屋本は貴重な台帳群である。

一〇種の台帳は体裁がほとんど同じで、筆跡も類似したものが多い。『傾城正月の陣立』『けいせい花発船』には各冊の綴じ目や第一丁に「吉二」の黒長角印があり、裏表紙に「芳二」の墨書のあるものもある。これらは所蔵者が台帳の散佚を恐れて捺印したり、墨書したものと思われる。「吉二」が誰を示すものかはわからないが、

この二種は同じところで所蔵されていたと思われる。また、『競伊勢物語』『同計略花芳野山』には裏表紙に「九二」の墨書がある。

これも「吉二」同様に所蔵者の墨書と思われ、「吉二」と「九二」は共通した意味を持つように思われるが、何を意味するのかわからない。また、『けいせい花発船』にある伊勢屋太兵衛の黒印も所蔵者を示すもので、これが墨消しされているので、旧蔵者と思われる。その他の台帳には印記や墨書がないので、確認はできないが、これら一〇種の台帳は一緒に伝えられてきたのではないかと想像する。

ところで、『伊賀越乗掛合羽』『けいせい大内の雛形』『傾城正月の陣立』『大湊恋憶』『けいせい花発船』『敵討千手護助剣』『同計略花芳野山』『新造妹背の中酌』の八種は所謂大惣本、名古屋の貸本屋大野屋惣八の旧蔵であった台帳が現存する。中でも『伊賀越乗掛合羽』『けいせい大内の雛形』『敵討千手護助剣』『新造妹背の中酌』は東京大学と京都大学の両図書館に大惣本が蔵されていて、二種の大惣本台帳の存在が知られる。また、東大本の『伊賀越乗掛合羽』と『けいせい大内の雛形』は伊勢屋忠兵衛の旧蔵本で、早くから名古屋で伝えられてきたと考えられる。各台帳の検討で述べた如く、これらの大惣本も高麗屋本も、削除や補訂などの修正は少なく整った書写の本が多く、いずれも上演台帳の原本ではなく、写しと考えられるが、同系統の台帳が多く、同じ名古屋に伝来していたのであるから、相互に何らかの関連が窺われる。大惣では入手した蔵

書は決して手放さなかったと言われ、また、本の消失を防ぐために同じ本を二種所有することを心がけていたという。同じ作品の二種の大惣本の存在がこのことを裏付けているが、これから考えると、高麗屋本は二種の大惣本の何れかを借り出して書写した可能性が高い。『けいせい花発船』は現存の大惣本(東大本)より高麗屋本の方が原型に近いが、現在散佚したもう一種の大惣本を書写した可能性も考えられよう。

さらに、『傾城正月の陣立』は検討の項で述べた如く、愛知県立大学付属図書館にも一種伝わる。やはり名古屋に伝来したもので、大惣本や高麗屋本との関連が想像できて興味深い。残りの二種『化粧六歌仙』『競伊勢物語』は大惣本との関連を示す写本も現在のところ見出せないが、両者の関係を否定する要素もない。

前項でも触れたことであるが、橘町は、二代藩主光友によって千本松原を開拓して作られた町であったので、この町には各種の恩典が許されたが、橘町裏芝居もその一つだった。したがって橘町裏芝居は橘町の町経営であった。高麗屋は名古屋橘町内屈指の旧家で、元禄年間より居を構え、橘町吟味所も同家に置かれていたという^③。具体的な記録があるわけではないが、橘町屈指の有力町人であった高麗屋が橘町芝居の経営に関わっていたことは想像に難くない。そうした一環として、橘町芝居のために上方芝居の台本や絵尽などを収集した可能性もある。橘町裏芝居は、宗春失脚後、長く休座

のままであったが、寛政一三年(一八〇二)六月、六七年ぶりに復興し、文化文政期の最盛期へと活発に活動を展開した^④。高麗屋本台帳の中で『同計略花芳野山』が寛政四年(一八〇一)六年の上演台帳であるから、一〇種の台帳は、この上演以降に書写されたものということになる。あるいは、寛政末年頃、橘町芝居の復興に先立って、高麗屋が芝居資料を収集した一環として、上方から収集するとともに、大惣本を借り出して書写させたものもあったと考えることができるかもしれない。

注

(1) 翻字は通行の漢字で示した。「／」は改行、「」の中は文字が小さいことを示す。() 内には第二冊以下の第一冊と異なる部分を示した。

(2) 柴田光彦『大惣蔵書目録と研究』(昭和五八年三月 青裳堂書店)、他。

(3) 坂倉久蔵編『橘町』(昭和九年二月 橘町奉仕団)

(4) 橘町裏芝居の動向については、拙著『地方芝居・地芝居研究——名古屋とその周辺』(平成二二年二月 おうふう)第一章

付記 貴重な資料の調査・報告をご許可下さったご所蔵者に謝意を表します。